

金田一春彦さん、いま、どこに

柴田 武

人は古い記憶を合理化し、美化する。私もそのひとりである。また、ここでは、文献に当たって史実を確かめるようなことはしない。

○五つ年上の先輩に初対面

金田一春彦さんは五つ年上。手の届く先輩だった。ただ、金田一さんは国語国文学科卒、柴田は言語学科の学生。さらに、相手は東京生まれ、東京育ち。こちらは、名古屋市内ながら、田舎の出身で、東京知らず。相手の父君金田一京助先生は有名な言語学者だけでなく、私のアイヌ語の先生。

そんな二人が初めて会ったのは、柴田が上京して間もない1939年の4月か5月だった。杉並区成田東のお宅にお邪魔した。おそらく金田一京助先生からのお話で、名古屋方言のアクセントを提供するのが目的だった。当時、アクセントの全国的情報はまだ不十分で、飛騨地方が東か西かはっきりしない状態だった。名古屋方言については、その大体は分かっていたものの、細部をさらに確かめたいのが金田一先生、春彦さんの御希望だろうと思ってでかけていった。

何時間にもわたる面接調査というようなものではなく、1時間足らずで終わった。そのときの金田一さんの話では、鹿児島市では、宿屋に按摩を呼んで、もませながら鹿児島アクセントを聞いてきたという話だった。微に入り細をうがつというより、大局をつかもうという姿勢なことがわかった。自ら計画して、見知らぬ一軒一軒を訪ねてまわるアクセント行脚はかつてなされたことはないと思う。東京にとどまって天下をながめるというやり方である。

○引き立てられて65年

初対面の時からことし(2004)まで65年に及ぶおつきあいだった。一つは、金田一さんの引きで、ラジオ番組に出演し、各種の委員に推され、また、雑誌に論文を書く機会を与えられた。いま思い出すと、東大を卒業する数か月前に「出版社にいい口があるんだが」と、就職のことまで考えて下さった。しかし、当時はトルコ語学習に夢中になっていたことで、収入はなくても、トルコ共和国へ行って、トルコ語を通じて1928年当時の文字改革、それを成功させたムスタファ・ケマルについて調べたい。その時まで、まともに就職しないつもりだったので、にべもなくお断りした。お勧めは一度ではなかった。今から考えれば、その出版社を特定できそうに思う。

○言語学科の学生に接近

これに対して、私の方でお世話した、小さなことがある。小さなことながら、金田一さんの学問的態度を説明するのに好都合な情報を思い出した。1940年代に2度ちょっとした頼みごとがあった。言語学科の学生がダベる集まりに参加させてくれというのである。それは、言語学科の連中との友好関係をつくろうというのが目的でなく、国語学の研究に使える言語学の方法論や考え方についての情報を得るのが目的だった。その後、金田一さんの論文は、いずれも、言語学科出身の有坂秀世氏の理論や枠組にもとづくものであった。

言語学科の学生が集まるのは飲むためのもので、そういう席で後年のチョムスキー理論が紹介されることなど期待できなかった。金田一さんは、酒をまったく口にしなかったので、こんな無収獲で退屈な会に出るのはやめてしまわれた。

わたしたち研究者は、文部省の科学研究費を得るために、面倒な申請書を期限までに出し、通って研究したあと、その報告書をつくる煩しさに苦しむものだが、金田一さんにはその経験がなかったように思う。一つ例外のように見られる、能登半島における八学会連合（のちの九学会連合）は、自ら申請されたものではなく、学会連合のメンバーに加わられたものに過ぎない。

この調査では、上方方言と東京方言を結ぶ方言アクセントが能登半島に見つかり、金田一さんはしばらく興奮気味だったことを憶えている。

これがのちに内輪方言と外輪方言とに分かれ、変化は前者から後者へ及んだと考えるようになった。

○内輪・外輪分布と周圈的分布

アクセントの内輪・外輪の対立は、上方方言と東京方言に対応し、歴史的変化は内輪→外輪だったと推測されている。ところが、一方で、一語一語の分布は、カタツムリが代表するように周圈的分布を示すことがある。上方のほうが新しく、地方ほど古いと推測される場合である。こうして、内輪外輪分布と周圏分布が対立することになる。

金田一さんにとって、この対立は深刻だった。いま年代も発表物も思い出せないが、金田一さんは小さな冊子に短いものを書かれ、そこで、「天下の悪筆家柳田国男」と書かれていたことにびっくりしたことがある。その理由は書いてなかったが、「周圏論を唱えるから悪筆家だ」という論のようだった。

言語地理学には有名なテーゼがある。「語にはそれぞれの歴史がある」というのである。語ごとに分布図は変わるというのである。内輪・外輪論も周圏論も言語地理学の中へ包み込まれる。しかし、そういう議論は金田一さんの好むところではなかった。

○科研費なし、お弟子なし

科学研究費を申請して通っても、事務的な処理が面倒である。金田一さんはそういう申請にかかわらず、好きな対象を楽しく研究された。また、そのように研究できたの

は、それだけの経済的なゆとりがあったのだと思う。

研究費を申請するのに、自分ひとりを研究者とすることもできるが、多くは共同研究者のほかに、若い研究者や学生を誘う。研究がフィールド・ワークや実験を伴うものであれば、研究代表者と個々人との間に何らかの学問以外の結びつきが生まれる。雑談中に、現在困っていることや、家族内の危機についてのことが耳に入る。

こういう研究グループの若い人々を、研究代表者の「お弟子さん」ということになる。

本来のお弟子さんは、もともと大学で何年か教わり、のち一生何らかのおつきあいの続く人々である。仲人を引き受ける。困ったことがあれば、ベテランを紹介する。いい医者を教える、といった日常のつきあいで結ばれた人々である。

こういう「お弟子」が金田一さんには無いということを近ごろ秋永一枝さんはやかましくいう。秋永さんは、金田一アクセント研究を継いでいる人だが、普通の「お弟子さん」とは少し意味が違う。

そうした状況は、金田一さんが科研費を申請したり、共同研究を計画されなかったことに一つの理由がある。

また、金田一さんは、初め東京外国語大学、そこをやめてから上智大学、その後、改めて名古屋大学、その他というふうに、在任期間がいずれも短い。お弟子さんができる状況ではなかったんだと思う。

東京外国語大学の場合は、学園紛争にぶつかり、早い時期に嫌気がさして、さっさとやめてしまわれた。私は東京大学で紛争にかかわったが、学生が要求することには聴かせるものがあって、興味を持って紛争に接した。金田一さんにはおおよ分らないことだったらしく、ずいぶん冷やかされた。

それに、金田一さんは、固有名詞を持ったひとりひとりの学生には特に興味がなかったのではないかと思う。全体がつかめれば、それ以上の個々の情報には興味がないのではないか。初対面のときの名古屋方言の接し方も同じ傾向だったことを思い出す。

○日本語特色論

金田一さんにとって、アクセント研究と並ぶ大きなテーマは、「日本語特色論」だったと思う。岩波新書上下2冊の「日本語」がその成果である。金田一さんは、この本を楽しんで書かれたに違いないと思う。あまりにも筆が進んで、1冊の予定が2冊になったんだと私は見ている。

それは、読み手である日本人が「そう言ってほしい」と思っていることをうまく取り込んだところに特色がある。多年にわたる、地方への講演旅行で得たものが含まれていると思う。講演の聞き手に対して、「日本語はやさしい」などとは決して言ってならない。「むずかしい言葉だ」「だから、外国人は簡単に話せるようにはならない」といった説明である。そのことは、外国人の日常を観察していれば、必ずしもそうでないことが

分かる。どんな外国人でも、日本人との一対一の会話が何不自由なく行えることは、何も珍しいことではなくなりつつある。実際に、“5週間プラス α ”あれば、読むことを除いた日常会話は身につくものらしい。

○敬語論

敬語についても、日本語固有の言語習慣という説明が俗耳に入りやすい。韓国語が日本語そっくりというか、日本語より多少複雑な構造を持っているといっても、一般の人は受け付けない。英米の言語との比較にとどめたいのである。

英語にも敬語的な表現があり、トルコ語にさえある。おそらくすべての言語がポライトネスと称する敬意を表現する言語手段を持っているのではないかと見ている。金田一さんは、もちろん講演の際にもそんなことは口にしない。まず大衆の考えが優先する。

学会でも、初めから正しいと思うことを解説するのでは、聴衆が逃げてしまう。俗耳のレベルから出発すべきことを金田一さんは教えてくれたように思う。金田一さんの文体が話し言葉的なのも、相手のレベルまでまず下りて行くためだったと思う。一般向けに話をするときの話し方として、私はこのことを金田一さんから学んで、実行している。

○異論と共鳴

細かいことをとり上げれば、鼻濁音を金田一さんは独立の音素としてとらえる。/g/と/ŋ/は別の音素と認める。私は、それに反対で、両者を同じ一つの音素と認める。金田一さん御自身が鼻濁音の所有者、柴田は自分のことばに鼻濁音がない。

シラブル (syllable) の訳語としても、いわゆるモーラ(拍)も「音節」と言って区別しないのが金田一さん。柴田は、「音節」と「拍」はもちろん区別する。

シラブルは音連続の一部分、拍はリズムの単位。シラブルはすべての言語に認められるもの。拍は言語によって認められることがある。ここに述べたことを金田一さんにむかって説明し、主張したが、受け入れられなかった。

語アクセントに語を弁別する機能を認めるのが金田一さんだった。ハナ(花)とハナ(鼻)の二語はアクセントで区別される。しかし、実際にどの程度同音語がアクセントで弁別されているか。大量の情報を分析すると、13%という数字を得た。この数字では、「アクセントは語を弁別する働きがある」とは言いにくい。この13%という数字について金田一さんの感想は聞かずじまいになってしまった。日本語のアクセントがそういう性格を持っているので、実際のコミュニケーションでアクセントが違っていても(方言の違いがあっても、言いまちがえても)さして差し支えないことに、この13%の数字が使えられている。

○やはり国語史家

金田一さんのアクセント研究は、アクセント史と結びついていた。いわゆる国語学者として当然のことである。いわゆる「金田一の類」としてアクセントの試聴にも使われ

る単語群は、現代でも平安時代でも共通の形と意味を持った語にしてある。「金田一の類」で調べれば、それだけで、その方言と平安時代の比較、ときに史的関係がつけられる。

いつか金田一さんがしみじみと「結局“金田一の類”だけしか残らないようだ」とつぶやいていらっしやるのを耳にしたことがある。

○国語辞書との関係

金田一さんは、国語辞書の編集者として方々の辞書に関係して来られた。そのうちで最も印象的なのは『三省堂国語辞典』だと自らおっしゃっていたことがある。「あれだけは初めから執筆したからなあ」という述懐だった。

私も『三省堂国語辞典』と『新明解国語辞典』について編集に参加することができた。しかし、この参加には金田一さんの引きはまったく無い。

私の知っている限りでは、金田一さんは4種類の辞書に名を出しておられるが、『三省堂国語辞典』だけは、自ら語釈をつけ、しかも野心的なものを目ざしたのらしい。

その一つに、すでにジャーナリズムでもとりあげられた「おんな(女)」の語釈である。

おんな(女) 人のうちで、やさしくて、子供を生みそだてる人。(以下略)

いかにも金田一流の語釈であるが、「女はやさしいと決まっているか」「子供を育てるのは女だけなのか」といった批判があり、14年後の第二版では

おんな(女) 人間の生まれつきのはたらきとして、子どもを生む力を持つ(ようになりうる)人

となった。問題点はすべて処理された。

しかし、金田一さんにとって、女はやさしい存在であり、そうでなければならなかった。しかも、その女は純和風で、家庭でも和服姿が期待され、御自身も和服だったらしい。出版社の広告に、訪問者と顔を並べた、自宅での写真がよく出たが、例外なく金田一さんは、和服で畳の上に座っての、純和風の接待である。奥様には金田一京助賞授与式などで20回以上お会いしているが、いつも和服である。私は、もう30年以上、外でも内でも和服を着たことがない。正座が不可能になったほど腰掛ける生活に45年前に切り替えている。まったく異なる世界を作っていたのだった。

こうした生活環境や、それを支える思想・好みが日本語特色論にも形を変えて現れているに違いない。

手の届く先輩に時々手をさし出しては、東京という私の知らない世界や考え方に接することのできたのは、金田一春彦さんあつてのことである。まことに有り難いことだった。感謝し、合掌する。(2004.7.15)